

小野小町生誕伝説の地 ——小野町。

小野小町—絶世の美女にして情熱的な恋歌の歌仙。その生涯については、全国各地で様々な伝説が語り継がれています。しかし、彼女にまつわる確かな史実は何ひとつ残っておらず、真実の姿は謎に包まれたまま。彼女が今なお多くの人々を引きつけてやまないのは、そうした謎の力によるものなのかも知れません。

さてここ福島県小野町は、古くから『小町生誕の地』と伝えられています。郷土に残る伝説を紐解いてみましょう。

時は平安朝初期、七里ヶ沢といわれたこの一帯に、公家の血を引く小野篁が救



▲小町生誕の地に建つ由來碑



へこの比古姫こそ後の小野小町である、とするのがわがまちの説です。残念なことに比古姫が生まれ育ったことを示す記録は残されておりません。しかし現在でも、小野篁を祭神とする矢大神社が人々の尊崇を集めていること、また、夏の風物詩「たかむら踊り」が広く親しまれていること、さらには、京に上がる比古姫の美しさに魅せられ振り返ったという片葉葦が山里に残されていることなど、やはりこの町は小野氏に深い縁をもつ土地柄。そして『小野小町生誕の地』というロマンが生きる土地でもあるのです。

ほんとうはどんな人だったの？

民撫育のためにやって来た。都の教養人であった篁は、この地を「小野六郷」と称して治め、産業や文化の礎を築くのに懸命の日々を送っていた。

ちょうどその頃、篁の莊園に仕える一人の娘がいた。愛子（珍敷御前）というその娘は息をのむほどに美しかった。篁と愛子はたがいに文を交し合う仲間となり、そして結ばれた。間もなく玉のように愛らしい娘が生まれた。二人は姫を比古姫と名づけ、たいそう大事に育てた。やがて比古姫が六歳になったある春の日、篁は妻愛子をこの地に残し、姫を連れ都へ上がったのだった。

六歌仙・三十六歌仙にも数えられる才能あふれる歌人。その一方では、類希なる美貌の持ち主として、数々の浮き名を流したと伝えられます。

自分に想いを寄せる深草少将を、百晩通わせる説話はよく知られるところ。このほか美男として名高い在原業平の求愛を、鉄火のごとくはねつけたとか、死して體を野辺にさらした體小町の逸話など多種多様な伝説をもち、彼女縁の地も全国各地に点在しています。

小野小町とはどんな人物であったのか——その本当のところは今もって歴史の謎とされています。しかし彼女が残した歌の世界に思いを馳せ、伝説の地を歩いてみれば、もしかしたら誰も知らなかった小野小町に出会えるかも知れません。

